

次の3点についてのみ、しかも我々自身の課題としてとらえかえしてのべることとする。

1、事実とはなにか、どう事実に近づき、選択し、どうとらえるのか。どうしたらそれができるのか？

とりわけて、事実とはなにかについて、のべたい。下記の(ハ)で具体的に述べる。また、現象と本体、正体のつながりとか、発展経過を経て再構成されるレベルの事実について(ロ、事実を構成していくしくみについて)と、事実と表現のスキマ、ズレ、主観についてみておく(イの部分)。

(イ) 事実の発見あるいは構成ということで、沖電気、日航を「巨大な中小企業」と規定したことがあった。——誤った事実のとらえかた<sup>や</sup>表現の誤りがなぜ出たのか、を具体的にみておく。沖、日航、のとらえかたにでた誤り、と三菱樹脂高野事件の舞台設定。——企業の自由と思想信条の自由の争点はいつ、どう設定されたか。なぜ、他の争点でなかったか？、争点を創ることである、などについてのちに展開する。

(ロ) 事実を把握する、構成していくしかけ

(ハ) 画期となる歴史的事件、事実の切取り方についてのポイント。

2、次に、今崎作品群にたいする批判とそのとらえかたについて——事実のとらえかたと表現。

3、以上をふまえて今回のリストラの事実、その正体？基本的性格および表現の仕方についてのべる。

**結論は、**すべて現代における人間存在について解く。労働や生活の仕方、質、

家族、地域もふくめて、その存在の仕方、質、問題点、可能性を解く、料理方法としてのルポ（とくにいまは、消費、文化、生活過程における疎外、情報への疎外に関心がある。そこが、人間存在を規定するのに大きな要因だから）。

## I 事実の発見、とらえかた（全体の構造のなかの位置、意義、正体との関連）

事実の発見、とらえ方にかかわって、《巨大な中小企業》論ともいうべきことが問題になった。沖+日航のときに、これは当事者からも出た規定である。

時間中にいくらでもお茶がのめ、床屋に行く、政党機関紙を配布する、日フィルより世間しらすだ、に象徴される労、使。労務管理のいい加減さ。労働のし方もそうだが、<sup>なにと</sup>弾圧のしかたが、死語の指名解雇とか乱暴だ。

だから、これからみるように技術革新とか、国際競争とか、民活、民営化に深くからんだ解雇というより、この後進性をたたく設定となっていた。

日航では、小倉を組合対策で外国たらいまわし、機長管理職制で、最高の技術革新の最先端の労務管理を機長の個人の評定でやる後進性。ということで、街工場のオヤジ管理論がでた。

20万ヶ所のチェックポイントをもつコックピット、1フライト1,000億円になる保険、600人ちかい人間が鉄の箱につまんで、世界中に飛ぶときに、80ヶ所ぐらいの勤務評定を機長にさせ、その緊張で仕事をさせるシステム。一見、後進性がめにつく。そこに事実をよせてみると、航空革命=現代の利便性=現代の恐怖・孤独と、これを生み出してくる事実がみえなくなってしまう。

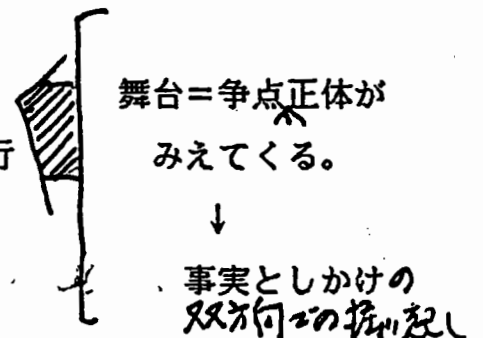
まず、第一段階としてこうした街工場的仕方、管理の事実がないわけではないが、このときにどんな事実を収集するのか、あるいは、事実にはひそむ、どの面をひっぱって正体、本質につなぐのかが問題だ。

街工場型

国際競争---世界に冠たるスケールの航空革命の進行

技術革新から

解雇の理不尽さ、古さからア7・D-4が



④  
**沖電気** 真空管、トランジスタ、自動化（電子、IC、光ファイバー）、通信の自由化、総合通信業への変革のたびに、事業ごとに解雇してきた（NTT自動化で交換手8万、東京だけで3万解雇）。高度経済成長で若年労働力が金の卵で、集団就職。田舎でてきて8年、恋人ができた、子ども2、3歳。3500人の退職募集。指名解雇へ。帰るときには古里は列島改造で破壊されてない。

理不尽な強権発動、すべてを労働者の犠牲でやる仕方を徹底的にたたきわけだが、技術革新で不用となった<sup>こいばた</sup>労働力の血液入れ替えの必然性を認めるのか否か。このリストラをどうとらえるのか。

例えば、やりかたが汚い、運動会に参加させない、旅行の土産を受け取らないとか……いじめ、排除にあつて、そのヒドサに目がいて、これをつく。近代的でない、手工業的仕打ちという意味で街工場論でた。⑤

しかし、起きている事実は、スケールも性格もちがうし、<sup>解雇をまぬがれ</sup>職場に残っているものたちにも、その正体が提起もできず、まして国民に沖がやろうとしている情報社会への批判もだせずに、告発が狭くなされることになる（8年たつてまた、おなじことがおきたわけだが、その必然性も、深く事実をとらえていれば提起できたのではないか）。

⑥  
つまり、運命をきめる大きなインパクトである、NTTの民営化、国際化、自由化、情報社会の性格など、その意味、効果など、時代を占う最大級の大事な事実が土台にあつておきた解雇なのに、そこに目がいかず（今回のアジアシフトもとらえるのがきわめて遅かった）、目前の解雇の痛さ、厳しさへの事実だけに論が行く。すくなくともその目前の事実が全体として持っている意味、構造を透けてみえるまで、ツメル作業なしに、事実を描いていつている。なぜか？

**三菱高野事件**の事実をどうとらえるか、どういう基本の争点、性格として、この闘争を位置づけるか<sup>●●</sup>が決まったときに、双方とも大舞台をかまえたのだ。総評も企業もスタンスを変えた。

つまり、東北の田舎の1新入生の就職問題の事実をとらえ、あるいはどうして、

「企業の自由、営業の自由と思想信条の自由」が基本争点に定まったときに、舞台が初めて全国版になる。双方の第一人者の学会、弁護団が最高裁まで争っていく。

これにより憲法レベルになり、総評7大国民訴訟になっていくのだが、その争点を格上げし創って行ったといえる。

もとより、つぎの事件、事実の契機でふれる父親の毒のある会社取引の拒絶、高野君の燃えるような、権利感情と13年のたたかい、これを支える共闘、連帯がそれを引き出すのだが、その人たちをどこに、どう結集し、運動をひろげるか、の問題としても、争点、事実のとらえかた、規定のし方が決めるのだ。

同じ事実をどうとらえるのか、どんな磨き方で、事実の本体を引き出すのか、が問われる。

**三菱帝国の神話** のときも、企業城下町の労務管理というか、日常の生活まるごとを支配する企業のシステム、たとえば、社員の子どもの誕生とか、各級入学祝いまでも労使で世話する体制が一方にあり、逆に、休日に一人で魚釣りにいっても、翌日朝には労務が知っているというCIAシステムが目についた。どうしても、そこでの人間模様、非人間模様に目がいく。

それに対して基本の争点は次にあったが、14万8千人の解雇に対抗できず。

① 日本独自の技術革新によって、これから、世界が必要とする船腹の50年分がつくられてしまっていたこと。

② サッカーコートが2から3面もとれるような50万トン、100万トンのタンカーによって、大量の石油輸送のメリットを最大限に発揮してきていたが、石油文明、資源の限界に伴う大転換にぶつかっていたこと。これを景気循環、業界循環ととらえていた。そこへ、第4次中近東戦争で、第一次石油ショックがでて業界をひっぱってきた大型タンカーが壁にあたった。

③ 労働集約産業が採算割れしてきたこと。東独とか韓国とかのような、低賃金でなくては、不可能になってきたこと。各ブロック毎に、各社が請負い、下請けがよってたかって、事故災害も手前もちでやるような労働が破綻してきたこと。

① アラブ石油へのアメリカへの依存、エネルギーの輸入に日本は  
② 湾岸コルセット設備=石油輸送の国内産=日本  
の依存

こんな土台、事実、争点が基本にあって、会社は、大分裂で2万5千人対350人に組合を割り支配していくなかで、起きた解雇、いじめであったこと。

II、事実とはなにか？---そしてそれ自体をも事実で立証する、しかけをどうつくるのか。

1、事件や問題のはじまり=契機---なにがどうゆうかたちでおきたか、の発見と整理。3の基本の争点、正体との間に、差が出てきて、これを埋めていく過程で「事実を」から、「事実で」、に変化してゆく。まず、1つ1つの部分的事実の収集だが、この収集、選択をまちがえると、3がみえてこないし、つかめない。逆にいうとみえるような事実を発見して行く。

高野事件 父親の拒絶の事実。3ヶ月の試用期間がすぎて本採用に当然なると思っていた高野君は、非採用をなにかのまちがいだと考え家にも通知しない。事実と分かったとき父親が上京。大学生協の活動家として安保のデモにいたことを履歴書に記載することを隠したのは、会社の幹部として採用した人物ゆえにふさわしくないから、解雇というのが会社の言い分。会社と3時間余も話し合う。「若者のこれからの長い人生だから目をつむってくれ。幸い私は、自民党の選挙後援会会長もしているから、代議士の保障が必要なら、自民党の大物をたてる」とかけあう。

会社は「頭のいい青年だから司法試験を受けなさい。その間の費用は会社がだすから」といって平行線。この毒のある提案を父はついに拒否する。ここから事件ははじまる。これがなければ、先ず事件は事件にならないままおわっている。父は落選してはいるが、後に町長選にもでて、政治をかえなくては、と変わる。

報知事件 いろいろあるなかで、「良心の歴史をつくりたい」とつぶやいた記者の酒場での告白が、争議の契機。

「明けない夜はない」は、「君をロマンチストから高次のリアリストへのぞむ

——なぜ、米を作る農民が、米を喰えずに飢えるのかがわからないかわいい君に」という俊太郎からの手紙。3日間も食事もせずに読みつづけた手紙。人生を決める。やがて、5人の子どもを残して夫が死に、自分もレットバージュで解雇され、どん底の貧しさのなかで、「夫と夫につながるものと手を切りさえすれば復職させる、世話になった恩返しだ」という特審局の目が眩むような提案。「子どもと山奥で、教師として精一杯教育に励めば、夫も喜ぶだろう、いや、夫のいのちはなんだったのか」とゆれながら、ついに、毒をふくんだ、この復職提案を拒否できたのも、この夫からのラブレターが出発。

「須長さん、授業がわからずに、6時間教室の机に座っている苦勞がわかるかよう」この叫びが「どぶ川学級」の出発。子どものところを解放する、主人公にしてい、とりくみの契機。

60年高度経済成長の列島改造で、海が埋め立てられ、陸にあがった漁師。1千万円単位の保証金を手にしてしまった、キヤバレーのおもしろさがわかるころにはそこをつく保証金。職員室に100万円をもっていき高校進学をたのむ漁師。子どもが出たばかりの一万円札であそぶ。合理化が中学出の集団就職の労働者をおそう。組合結成、全員解雇。地域も会社も社宅も、家庭もあれにされる。この

なかで、家族対策として、第一組合、第二組合の子どもも一緒にめんどうをみる。

この放り出された子どもたちに、学ぶよろこび、発見するよろこびをあたえ、なにより仲間をしらせ、自分の主張をもたせて、主人公とする学級がはじまる。

その契機をつくった、子どもの願い、こころの表現の言葉が「6時間・・・」。

会社からのしめつけ、最

「どこのエライ親のヒョ。ヒョーより親カ団のチロ親やね」と訴の子いねん。

「どこまでも子どもを信じて」「教育は死なず」のキーはこれ。11回裏切られたら12回信じられるところを探せ。これは祈りでない。信じられるところ創るんだ」という子ども観、教育観、人間観。大抵、つながりができるよ。(も)

2、双方の口実の整理、展開。偏らず、十分にそれぞれの言い分がみえるように。

今日では、言い方とか、ことばとしては、双方が接近してきている。複雑さが増してきていること。生活重視のためとか、生活者の立場、人間尊重、創造的リストラ。選択、共同、創造（21世紀型経済システムのサブタイトル。通産省）国民生活白書＝豊かな人間のまじわり。企業人間の脱皮、会社人間の克服などをいいながらリストラしたり、解雇、弾圧したりする。これまでよりはるかに言い分が複雑。

3、基本の争点の発見、確立。事実の選択・ツメ・エクス（＝矛盾点＝問題点＝正体）を「事実で」説明してゆく。三菱、沖電気、日航の基本争点をみよ。

4、双方の争点についての言い分、その言い分なり争点の原動力の発見、確定。

5、原動力の拡大、組織、運動展開（たとえば、共闘会議とか、守る会とか）

6、争点をモノサシにしてみた結果、評価。（勝敗、次への種蒔きなど）

例えば、職場復帰できたが、結局やめた、カネを余分にとった・・・負けたが職場が変わった・・・とか？

Ⅲ、《今崎作品についての批判ととらえかた。でている主な指摘》。

- 1、事実によりそっていない。スキマがある。事実の証明でなく感想だ。
- 2、一方の側にたって、あるいは入れこんで、最初から結論が見えてしまう。
- 3、文章が下手だ。

著者の登場が早い。読者が判断したり、考えようとしているのに、その事実を積み上げていくまえに、自分の感想、意見、結論をいそいでおしつける。

例えば、胸が痛くなった。胸が熱くなったなど、感じて行くまえに感想をいう。

読者が

自分の感情を事実で積み上げて立証していくこと<sup>をとばす。</sup> ~~はたしてそれは精神的な探りか~~  
~~が欠ける。~~ 初期の作品はちがう。一時期からでてきたことだが、方法論がかわったのか。読者のことをその場合にどう考えているのか、の計算があるはず。それを知りたい。そこに事実とのスキマが生じる。事実をツメルのではなくて逆に、コトバ=感想で処理することだと思いがいかが。

事実より、一層すばらしくコトバで事実が表現できればそれはそれでよい。ただし、それはフィクションとなるのでは？

1 方のほうにはじめっからたつ。争議など、なぐられた側で書くわけだからそのひどさを探して、書くことになって行くわけで仕方ないわけか？ 読者を不特定多数として、描いていくのか？ どんな事実をだれにむかって、どう、ということと関係あり。事実を積み上げて行く過程に読者を誘い込む仕方、その醍醐味、スリル、リアリティーより、ことの善し悪しのストーリーを追ってしまうのではないか？

文章は、趣味のちがいのあろう。うまくはないが、わかりやすい。文章自体で表現するより、事実のもつドラマを伝える仕事をするストーリー作家。

では、なぜ、40冊か。何か魅力がなければできないこと。

2) とりわけて、この20年間の激変した社会、時代に、今崎作品では歴史的画期の事件、事実がどう記録され、表現されたのか、否か？ どう把握されるべきだったのか？ それが、なぜ、できたりできなかつたりしたのか？ 事実からはなれていたのか、よりそっていたのか？ 事実の発見、構成、主張。

1、前提としての松川事件—事実の性質がきわめて単純で明らかだったもの。

権力犯罪が、乱暴にしくまれ、争点がかっきりしていた典型。基本の争点を事実によって描けばみえた。ただし、真実が実現するには、700万人の、いの



ちの統一戦線ができ運動を展開してできたのだが。<sup>物理的にも証明できるズサン</sup>  
さ乱暴さ。

は、まず、<sup>7-4 7-7 7-8</sup> 転がくも

20年におよぶ事実の掘り起こし、確定、やったか、否かのまえに、死刑、いのちにかかわるのだから「公正裁判」をせよ（サカイトクゾーら結核患者のいのちの共通性で発足した守る会を軸に）から「無実の裁判」へ変化していく過程での事実はずごいドラマだが。<sup>ひびり、なすけやむ</sup>（赤間被告もふくめて、<sup>①</sup>20人が団結して闘うことが獲得できたこと（「真実は壁をとうして」をひきだす）<sup>②</sup>諏訪メモが発見されたとき、の2回、慟哭したと鈴木団長にきいた。これが契機）。

石炭 <sup>か</sup>

（<sup>①</sup>水より安い石油が可能なか <sup>②</sup>1次、2次ショック）

2、<sup>石炭</sup>水より安い石油への転換=すべてのエネルギーを石油にかえ、20年で石油ショック。60年の転換も73年の転換もみれず。ここが不十分だったばかりに遅れいっぱい。70年半ばよりつくられた日本型企业社会の形成がつかめず。

60年代、軽工業から重化学工業への変化。鉄は国家なり。列島改造により、15年間で4000万人の民族移動（これこそ、人類史にないこと。ついでに「人類史にもないリストラ」なる言葉がでてくるが、大ウソ。最大のことは、直立二足歩行になったこと。言語、道具、労働の仕方かわる。そして、よつんばいから、二足歩行になった故に、産道が狭くなって、無数の母体が300万年くらいの間、死につづけたリストラこそが、人類にかつてないことといえる。

鉄を使いだした人類のリストラなども最大。しかもそれがおわる60年代を経て、「重厚長大」が「短小軽薄」になるなども最大のリストラ。1929年よりの世界大恐慌もよくいうが、どういう事実かをいわないとまちがう。こうした形容や感想はダメ）こうしたことが高度成長の本質、本体、評価が長い<sup>（向）</sup>できなかった原因。原発もおなじ。

3、技術革新の展開は、先の沖、日航、三菱帝国をみよ。

4、NTT、国鉄民営化がみえなかった。全電通は国の神経、国鉄は国の動脈（事実、日本資本主義の発達は富国強兵政策で、その軸にこの力、ゆえに民営化は

ありえないという国家論、権力論で処理してきた。つまり国の背骨だから、民間には移らない、故にスト権は解放されないの発想で法理論。この思い込みで一貫したまま。これに対して一気に臨調はこえた。沖もおこった事実がみれないことになる。まして、技術革新にともなう労働力の交換、からだ全体の血液交換などみえず。

5、環境、いのち……福島屠殺場、スモン、いのちの賛歌。

6、情報、文化疎外、消費、生活過程の疎外創造……日フィル、市民とともに。生協＝生活、日常、協同、創造。地域を根づく。

7、湾岸戦争 小沢戦略のバネに新世界秩序形成、強力な内閣形成。国際貢献、国連活用、改憲要因。アジア経済安保 ASPEC体制。

8、リストラ 85年前川レポート、土地・株本位制、一億総投機家。肥大化しきった信用＝虚像。日本型企业社会の定着、地域・家庭までの浸透。採算主義・効率主義・結果主義からくる競争体制、大量生産・大量消費の破綻、破壊からくる不況の性格の確定。対するリストラの性格。

9. 社会主義の崩壊。

IV いま、リストラの性格、事実をなにで、どう、規定していくか？

管理職の解雇＝左翼、活動家、単純労務や技術革新とのズレではなしに、社を形成し、労働し管理し、組織してきた者たち……例えば、日本型企业社会のどんな性質、機能をどう背負って働き、生きてきたのか（家族をふくめて）。ここの部分に凝縮されたものはなにか、その運命がどうかえられようとしているのか。

つまり、これまで、何をどうやってきたのに、どう不用になったのか、そのなかに何があるのか？。今回のリストラの性格がつまっている宝庫。

日本型企业社会がすべてと考えたり、効率、採算一辺倒、会社人間、仕事人間になるなど、経団連、通産省はいいながら、いまだにこうすることのなかにある、

企業社会の再編・形成のねらい性格。この再編にとって管理職はどう不用なのか？

人間尊重、生活重視・「個がいきる企業、経済」、創造的リストラという経団連方針は財界の企業社会の戦略的哲学を示すものだが、これとどうかかわるのか、否か？。

この新しい戦略、哲学、実務からなる企業社会づくりから排除された管理職群解雇のなかに正体がみえる。

管理職とともに、事実として、日常として、生活の場で具体的に、人間尊重、豊かな生活者としての共感、共通の視点で事実を洗ってみる。あるいは財界の戦略をみる。

首になったときこそ必要な組合（企業社会の三種の神器のあらたな役割）のありかたもふくめて。